

登場人物

西村 (51)	藤野 (29)	永田明美 (32)	高木春香 (29)	大川和也 (41)	榎佑一 (25) (27)	奏千沙 (24) (26)
千沙の会社の課長	千沙の会社の先輩	佑一の会社の先輩	事務員	精神科医	営業職の会社員	会社員

登場人物表

あらすじ

心療内科・精神科を専門とする大川病院に、奏千沙（26）という患者がやって来た。

千沙の目的は治療ではない。以前この病院に通っていた元恋人、槇佑一（28）のことで話をしに来たのだ。

二年半前の雨の日、傘を忘れたことがきっかけで千沙は佑一と出会い、付き合うようになった。順調に交際していた二人だが、千沙の配属先が変わり職場環境が悪くなる。

先輩からの暴言、苦痛に一人で耐えていた千沙だがある日、佑一の前で泣き崩れてしまふ。それ以降、寄りかかる場所を見つけた千沙は佑一に依存するようになる。

うつ病の症状があるにも関わらず病院に行こうとしない千沙。佑一は懸命に彼女を支えたが、負の感情に引っ張られ自身も病気になるってしまう。

このままでは共依存になる、二人とも潰れてしまうと思った佑一は、悩んだすえ千沙に別れを告げる。一人になった千沙だが、自殺をする気は起きなかった。振り返れば、佑一という依り所があったからこそ生きて来れたし、佑一がいたからこそ甘え、現状を変え努力をしていなかった。

一人だけど一人ではない、手を伸ばせば助けてくれる所（病院や相談所）はある。別れ際、佑一に言われた言葉を思い返し、千沙は正しく助けを求めようと、専門機関に電話することを決意する。

ようやく心の整理がついて大川の元を訪れた千沙。二人を引き合わせたいという大川の申し出を断り、千沙は病院を後にする。

努力は報われると信じたい、奇跡が起きることを願う大川の希望通りそのすぐ後、千沙と佑一は再会を果たす。

再会できたなら、佑一は千沙に伝えようと思っていたことがあった。

二人が出会ったのは雨の日ではなくその半年前、千沙の就職試験の日だった。社内試験に悩んでいた佑一に助言と励ましの言葉を贈った千沙。

佑一はそのことが忘れられず、千沙のこ
とを気にかけていた。出会いは二年半前では
なく三年、千九十五日前。

そのことを話そう、あの時言いそびれた
お礼の言葉を今度こそ伝えようと決意し、佑
一から千沙に話しかけるのだった。

○大川クリニック・待合室

待合室のソファに座っている千沙、同じソファに老婆の姿、高木が老婆を連れて去る。

目を閉じる千沙、水槽のエアポンプの音。

高木の声「二十三番のかたー」

千沙、はっとして手元の番号札を確認する。千沙を見ていた高木、目があつて微笑む。

高木「二十三番ですか？」

千沙「あ、はい。すみません。います、ここにいます」

高木「よかった、中へどうぞ」

診察室へ入る千沙。

高木、診察室のドアを閉める。

○同・診察室

机上に千沙のカルテ。カルテを見つめる大川と、丸椅子に座る千沙。

大川「確認のため、お名前をお願いします」

千沙「奏千沙です。奏でる……えっと、演奏のそうに、ちさは千の」

大川「あ、漢字は大丈夫です、カルテに書いてあるので」

千沙「すみません……」

大川「今日は頭痛と不眠、眩暈が一年半前から……」

千沙「それは回復してます。すみません、それじゃなくて……」

大川「ん？ えーっと、以前は別の病院を受診して」

千沙「そこで治してもらいました。完全に治ってるかは、よくわからないけど」

大川「ならどうしてうちに？ 前の先生と合わなかったてことはないよね、治ったんだから。向こうの先生と何かあった？」

千沙「いえ、いい先生でした。優しかったし、どうしようもない私に一年半も付き合ってくれました」

大川 「だよねえ、この先生は僕も知ってるけど」

千沙 「榎佑一さん、知っていますか？」

大川 「え？」

千沙 「この患者さんですよね？」

大川 「そ、そういう他の患者さんの個人情報

は……奏千沙さん？ って、榎くんの」

千沙 「元彼女です」

大川 「あ、ああ……あ、やば。えっと、他の

患者さんのことは……」

千沙 「彼と私の名前がすぐに繋がらないって

ことは、彼はもうここには通院してない

んですね」

大川 「……」

千沙 「よかった、ありがとうございます」

大川 「……今日は、どうされました？」

千沙、姿勢を正して大川に向く。

千沙 「話を、聞いてもらいたくて」

大川 「話？」

千沙 「この病院は、診察時間最後の患者さ

んの話は長く聞いてくれると聞いたので

大川「えっ、その噂どこから……ああ、そうか、噂にもなるよねえ」

千沙「私の話も、聞いてくれますか？」

大川「……」

大川、カルテを見つめて諦めたように小さく笑う。

大川「一つだけ、お願いがあるんだけどいいかな？」

千沙「？ はい」

大川「最後の患者さんの話を長く聞くなってアレ、他の人に広めないで。スタッフからも注意されてるの。噂広がったら困るから」

千沙「あ、ああ……ごめんなさい」

大川「奏さんが謝ることじゃないよ。その様子だと、話したいことはある程度まとめてきてる？」

千沙「はいっ」

大川「じゃあ順番に、ゆっくりでいいのでお話を聞かせてください」

千沙、服の袖を握りしめ、決意したように口を開く。

千沙「彼との出会いは雨の日、」

× × ×

フラッシュ・駅ビル出口

雨の中に飛び込もうとした千沙、腕を掴まれ振り返る。

千沙の声「私が大学を卒業してすぐ、二年半前のことです」

千沙の背後には佑一。

× × ×

フラッシュ・千沙の部屋

佑一の腕を掴む千沙の手、振払われる。

千沙の声「別れは今から一年半、正確に言う
と一年と七ヶ月前」

玄関で泣き崩れる千沙。

千沙の声「あれから一年半、ようやくここに
来ることが出来ました。助けてって、素
直に言えるようになった」

× × ×

フラッシュ・千沙の部屋

向かい合って手を握る千沙と佑一。

千沙の声「私と彼の、二年半のお話を聞いて
ください」

タイトル「心の病と恋する1095日」

○（回想）駅ビル・出口（夕）

T・2年半前

雨が降る空を見上げる千沙。

千沙の横を、鞆を頭上に抱えて雨除け
したスーツの男性が通り抜ける。

千沙、振り返って売店を見つめる。店
頭にある傘を男らしき人物の手が掴
んだ。

駅は混雑して、鞆から折り畳み傘を出
す人もいる。

鞆を胸に抱え駅ビルを出ようとする
千沙の腕が掴まれる。

佑一「すみません！ 傘、買おうとしてま
した？」

千沙「え？」

佑一「傘買うつもりだったのかなと思っ
て。さっき、こっち見てたから」

佑一、値札のついた傘を千沙に見せる。
売店で売れた最後の一本だ。

千沙「いや、あの」

佑一「ごめん。俺が最後の一本買ったから」

千沙「あ、いや……大丈夫です」

佑一「傘ないの？」

千沙「あ、はい……」

佑一「あの、よかったら……嫌じゃなかつ
たら、送っていくから一緒に」

千沙「あっ」

千沙が振り返る。

バスの扉が閉まり、出発した。

千沙「ああ……」

佑一、バスを見ていた視線を千沙に向ける。

佑一「もしかして、あのバスに乗るつもりだった？」

千沙「あ、はい。すぐだから走ろうかな、つて……ちようどバス、来てたし」

佑一「嘘……ごめ、ごめん！」

千沙「いえ。あの、腕」

佑一「わ、あつ、ごめん！」

佑一、慌てて千沙の手を放す。

千沙、佑一に向き直る。

千沙「それで、えっと……何でしたっけ？」

佑一「………ごめんなさい」

○（回想）駅ビル・ファーストフード店（夕）

混雑している店内。

食事をしている客ばかりだが、千沙達のテーブルにはドリンクだけ。

佑一「改めてごめん。雨の中に飛び込むのかと思って」

千沙「雨の中に飛び込む、で間違っではないですけど」

佑一「やっぱり何か奢らせて！ 買ってくる、

何が食べたい？」

千沙「あ、いえ、珈琲だけで大丈夫です」

佑一「遠慮しないで。こんな安いところに来て来ておいてあれだけど」

千沙「本当に、おなかすいてないので」

佑一「ほんと遠慮しなくていい……もしかして嫌だった？」

千沙「え？」

佑一「バス乗れなかったお詫びにここまで連れて来てたけど……もしかして、嫌々ついて来てくれた？」

千沙「あ、いえ……」

佑一「待って俺今、変なやつになってる？」

千沙「え？」

佑一、頭を抱えるなど自己嫌悪で一人暴走。

佑一「ナンパした感じになってるよな、急に

声かけて無理やりご飯いこうって、普通の女の子はついて来ない……え、なんでついてきたの？」

千沙「……え？ 私に言ってます？」

佑一「普通は嫌がるよな。俺が無理やり連れて来たのか。ごめん、出よう！」

千沙「あ、いえ。だから大丈夫……嫌じゃないので」

佑一「大丈夫じゃないでしょ、嫌がるよ、普通は」

千沙「なら私は、普通じゃないのかな？」

佑一「え？」

千沙「電車の中で、かっこいいと思っただけ……あ、いつもの人だ、まあいっかつてついてきたんですけど」

千沙、動揺を隠すように紙カップの珈琲を飲む。

佑一「もしかして、俺の事覚えてる？」

千沙「え……あ、はい」

佑一「え、ほんと？ 本当に？」

千沙 「朝、同じ電車に乗ってますよね？」

佑一 「……え？」

千沙 「違いました？ 朝、駅のホームや電車
の中で時々見ると思っ

佑一 「あ、そっち？」

千沙 「そっち？」

佑一 「ああ、いや、見てる見てる！ 俺もず

っと見てたから！」

千沙 「ずっと見てた？」

佑一 「いや、えっと……声かけたいと思って

たんだ、ずっと。だからさっき目があつ

た気がして……けど、傘見てただけだよ

ね？」

千沙 「見てたのは傘だけ……嬉しいです」

佑一 「嬉しい？」

千沙 「声かけてもらえてラッキーというか。

かっこいいと、私も思ってたので」

佑一 「アピールポイントだから」

佑一、名刺を取り出して千沙に渡す。

佑一「横佑一、二十六歳、医療器具の営業や
ってます。アピールポイントは、顔がい
いところ、です（反応を窺う様に）」

千沙「自分でいいます、それ？（微笑）」

佑一「あ、いや、これはそっちが」

千沙「奏千沙です。名刺まだない……」

千沙、テーブルにあったペン（アンケ
ート用紙の所にあつたもの）を手に取
り、紙ナプキンに自分の名前を書く。

千沙「演奏の奏に千の千、すなって書いて奏

千沙です」

佑一「……綺麗な名前だね」

千沙「二十四歳、イベント会社の事務職やっ
てます」

佑一「二十四？ 今年就職じゃなかったっ
け？」

千沙「浪人してるんです、私。だから同級生
と比べると一つ年上」

佑一「ああ、なるほど。……あのさ、連絡先、
交換しない？」

佑一、テーブルの上に置いてある自分のスマホに視線を落とす。

佑一「もしよかったら次はご飯でも食べに：
行かないよな、ごめん！」

携帯を収めようとする佑一の手を、千沙が掴む。

だがすぐに、お互い手を引っ込める。

千沙「行きたいです。ご飯、一緒に、行きたいです」

恥ずかしそうに俯く千沙、鞆の中から自分の携帯を取り出す。

千沙「よろしく、お願いします」

頭を下げる千沙につられ、佑一も頭を下げる。

佑一「こちらこそ、よろしく」

○（回想）駅・ホーム（朝）

携帯を見ている佑一

千沙がホームに走り込んでくる。

佑一「おはよう」

千沙「あ、おはよ……ございます（息が切れている）」

佑一「寝坊？」

千沙「携帯の充電切れてて、アラーム鳴らなくて」

佑一「あー、だから昨日、既読にならなかったのか」

千沙「ラインくれてました？」

佑一「夜にね。よかった、無視されたんじゃないかって」

電車に乗り込む佑一。

千沙、申し訳なさそうに後を追う。

○（回想）電車・車内（朝）

ドアが閉まって電車が発車。

佑一、ドアにもたれて窓の外を見る。

佑一「目覚まし時計持っておけばいいよ」

千沙「目覚まし時計？」

佑一「アナログの目覚まし時計。毎日同じ時間にセットしてたら、忘れないから」

千沙「でも、時計の電池切れてたら」

佑一「スマホと両方使えばいいよ。そしたらどっちかが壊れても、どっちかが生きてる。もし買うなら可愛いのが買いたいよ、お気に入りになりそうなやつ」

佑一、窓の外を見る。流れる景色、晴れた空。車内のシート席は全部埋まっているが、立っている人はまばら。駅に着き乗客が入ってくる。

人と肩がぶつかりそうになる千沙の腕を、佑一が掴む。

佑一「あ、ごめん……」

千沙「いえ、私のほうが……」

少し距離をとる二人。

佑一「あのさ、敬語やめない？」

千沙「え？」

佑一「同じ会社ってわけじゃないんだしさ、友達感覚でいいよ」

千沙「あ、いえ、そんな……」

佑一「友達？ ……いや、そうじゃなくて」

千沙「？」

佑一、千沙を一瞥して頭を抱える。

佑一「どうしよう、タイミング間違えた」

千沙「タイミング？」

佑一「今言ってもいい？」

千沙「？何をですか？」

佑一「好きです、付き合ってください」

千沙「……え？」

佑一「初めて会った時から可愛いと思ってたんだ。ていうか一目惚れで……ラインしててもいい子だなと思ったし……こんなところで言うことじゃないけど」

千沙「あ、いえ……」

佑一「（恥ずかしそうに）タイミング違うよな、やっぱ。ごめん、忘れて」

千沙「え、嫌です。私も好きだから、好きです！」

大声になり周囲を見渡す千沙。視線を集めていたことが恥ずかしくて、俯く。

佑一、千沙の方を向いて。

佑一「それ、オーケーってこと？」

千沙「あ、はい（小声）」

佑一「や、った……っしや！（大声）」

再び周囲を気にする千沙だが、佑一の

嬉しそうな顔を見て微笑む。

佑一「じゃあやっぱり、今日から敬語禁止」

千沙「あ、そうですね……そう、だね」

佑一「あと名前も」

佑一の声を遮って車内放送。

減速する電車がホームに入る。

千沙「あ、私ここなので」

躊躇いながら電車を降りる千沙。

佑一「千沙！」

振り返る千沙、佑一がスマホを掲げて

いる。

佑一「今日から電話する。夜かけるから！」

ドアが閉まる。

手を振る佑一、出発する電車。

千沙、笑顔をこらえ切れないまま、歩

廊を歩く。

○（回想）電車・車内（朝）

窓の外を見つめている佑一、はっとして背後に目をやる。乗客の何人かが佑一を見ていたが、目が合うと慌てて視線をそらす。
軽く頭を下げるが笑みを抑えきれなくて、窓の外を向く佑一。
流れるように変わる景色。

○大川クリニック・診察室

丸椅子に座る千沙と、デスクに体を向けたまま話を聞く大川。

千沙「電車の中にも出会いはあるって、本当なんです。まさかあんなところで出会って五日で彼氏ができるとは思わなかった」

大川「出会って五日？」

千沙「雨の日が金曜で翌週の水曜に告白されたので」

大川 「奏さん、人の顔覚えるの苦手なんだっ
け？」

千沙 「ああ、はい。初対面の時はぼやつと、
何となくで見ちやうので」

大川 「榎くんの顔は？」

千沙 「正直、かっこいいってことしか覚えて
なかったです。話しかけられなかったら
たぶん、気づかなかった。あ、これダメ
ですか？」

大川 「ダメではないよ。人には得手不得手が
あるからね」

千沙 「えてふえて？」

大川 「得意なことと、苦手なことがあるって
こと。奏さんは人の顔を覚えるのが苦手
だけど、人をほめるのは上手だ」

千沙 「え、そうですか？」

大川 「初対面の女性にかっこいいって言われ
て嬉しかったと思うよ、彼は」

千沙 「あれは……失礼ですよ、常識的に考
えて」

大川「常識や普通は人によって形を変えるからね。別の人に言ったら失礼かもしれないけど、彼はそれを喜んだ。だからあの時、奏さんの言葉は正解だったんだよ」

千沙「…：はい」

服の袖を握りしめる千沙。

千沙「先生、私のしたことは正解だったんでしょうか？」

大川「え？ うん、だからあったと思う」

千沙「出会いの話じゃなくて…：今でも思います。どこで間違えたんだろう、どうしてもれば正解に行けたんだろうって」

裾を強く握る千沙。

大川、体を千沙のほうに向ける。

大川「話の続き、聞かせてもらえますか？」

千沙、頷く。

○（回想）千沙の会社・事務所

電話対応している千沙の隣のデスク、誰もいないが電話が鳴っている。

服装は夏に変わっていて、エアコンがついている。

千沙 「はい、わかりま……：：：畏まりました。えっと」

ドアが開く大きな音、藤野が事務所に入ってくる。

藤野 「あっちいな、もう。今年の夏は涼しいんじゃないのかよ」

藤野、千沙の隣の席の電話が鳴っていることに気づき取ろうとしたが、着信が終わってしまった。

藤野 「おい、奏！」

千沙、藤野を見上げ、頭を下げる。

藤野 「どこからの電話だ？」

千沙、話をしながらメモ帳に「お客様です」と書く。

藤野 「客？ あの婆さんじゃないよな？」

千沙、首をかしげる。

藤野が千沙からペンを奪い取り、メモ帳に「誰だ」と書き込む。

千沙、「田中様です」と書く。

藤野「いつもの婆さんじゃねーか！」

藤野、電話のフックを押す。

千沙「あっ……」

藤野「相手すんなって言ってるだろ。それに、

俺の電話鳴ってたから」

千沙「え？」

藤野「だから、俺の電話が鳴ってたの！ お

前が無駄話してるせいで、俺の電話がつながらなかったじゃねーか」

千沙「でもそれは、藤野さん宛の電話で」

藤野「会社にかかって来てんだから、暇なや

つが出るよ！」

千沙「暇なわけじゃ……」

藤野「なに？」

千沙「なんでも、ないです」

舌打ちして席を離れる藤野。

藤野「つーか、なんで一般客がうちの番号知ってんだよ」

千沙、藤野が去ったことで安心し時計

を見る。午後二時半。

千沙「あと三時間半……定時で帰れたらあと、

三時間半」

藤野の声「奏！　おい！」

千沙「はいっ！」

千沙、立ち上がって藤野に近寄る。

○（回想）千沙のアパート・外観（夜）

千沙の部屋に灯りがついている。

佑一の声「じゃーん、プレゼント！」

○（回想）同・リビング（夜）

ソファに座る千沙と佑一、千沙の手に可愛い柄の目覚まし時計。秒針が音を立てて動いている。

千沙「プレゼント？」

佑一、満足そうな顔でテーブルの上に置いていた缶ビールを掴む。

佑一「時計まだ買ってなかっただろ？」

千沙「今日、誕生日じゃないよ？」

佑一「知ってるって。あ、もしかしてもう時計買ったじゃない？」

千沙「まだだけど……どうして？」

佑一「前部屋に来た時になかったから。千沙の部屋って何もないよな、殺風景」

千沙「買い物するときに悩んじゃうタイプで。

悩んで悩んで、結局買わないから」

佑一「羨ましいな、俺はすぐ買っちゃうタイプだから」

缶ビールを一気飲みした佑一、缶をテーブルに置き、ため息をつく。

佑一「……元気してた？」

千沙「え？」

佑一「最近会えてなかったし、朝の電車でも会わなくなったから」

千沙「あ、ごめんね。配属先変わって、場所も時間も変わったから」

佑一「新入社員を三ヶ月で移動させる会社ってどうなの、大丈夫？」

千沙「……私は、他の所は知らないから」

佑一「今の所どう？　慣れた？」

千沙「……まだ一ヶ月も経ってないから」

佑一「早く慣れるといいな、何かあれば相談

乗るから……って千沙、携帯見ないもん

な」

千沙「あっ、返信遅くてごめんね」

佑一「いいよ、千沙がそういう性格だって知

ってて付き合ったから」

千沙「……」

佑一「でも何かあればほんと、連絡していい

から」

千沙「うん」

佑一「……千沙ってさ、プライド高いよな」

千沙「……え？」

佑一「弱み見せないし、演技してる感じ？」

千沙「え……初めて言われた。演技してるよ

うに見える？」

佑一「うーん、なんかこう、いい子なんだよ

なあ、隙がないくらいに」

千沙「……佑くん、酔ってるよね？」

佑一「俺？　まだ一本目だから」

千沙「お酒弱いなの？」

佑一「全然、いくらでも飲める。あ、その目

覚まし時計、二種類の音が出るんだ」

千沙「二種類の音？」

佑一、目覚まし時計を手に取ってボタンを押す。

ボタンを切り替えると、別の音声。

千沙「本当、面白い」

佑一「これで遅刻しなくなるな」

千沙「してないよ、今でも！　でもこれで、

絶対に遅刻しないから大丈夫だね……朝

怒られることは、なさそう」

佑一「怒られてんの？」

千沙「あ、いや、えっと……」

佑一「会社、楽しい？」

千沙「……え？」

佑一「電車一緒だった時は楽しそうだったけ

ど、今はどうかかなと思って。返信も最近
は特に遅いし」

千沙「……忙しいから、いろいろ……忙しくて。それに会社ってお金稼ぐために行く所でしょ、楽しいって違うくない？」

佑一「えー、千沙ってそういう考え？俺は楽しいけどな。いい人ばかりだし同期とは仲いいし。あ、今度紹介する」

千沙「会社の人？」

佑一「同期だから半分友達みたいなもん。友達も普通に紹介する」

千沙「……私、人見知りだから」

佑一「大丈夫だって。千沙、可愛いから」

千沙「可愛いとかそういう……」

佑一、後ろから千沙を抱きしめる。

佑一「可愛いよ、千沙はかわいい」

千沙「……酔ってるよね？」

佑一「ずーっと好きだった。千沙、好き」

千沙「……うん」

千沙の髪を撫でて振り向かせる佑一。

時計の音が室内に響く。

○（回想）千沙の会社・外観

太陽がビルを照らしている。

夏の暑そうな日差し。

藤野の声「奏！　おい奏！」

○（回想）同・休憩室

昼食を食べていた千沙、おむすびを靴に突っ込んで立ち上がる。

○（回想）同・事務所

千沙のデスクの隣に藤野が座っている。

小走りで藤野の元へ行く千沙。

千沙「すみません、呼びました？」

藤野「呼んでるよ、さつきからずーっと呼んでる」

イライラしている様子の藤野。

千沙、頭を下げながらちらっと時計を

見る。午後十二時十分過ぎ。

藤野「なに？　時間気になんの？」

千沙、慌てて顔を上げる。

千沙「いえ、すみませ……」

藤野「あのさあ、俺ら外回りは休憩なんてないの。わかる？ 酷いときは車中で飯食ってんだよ」

千沙「はい、知ってます」

藤野「知ってる？」

千沙「あ、いえ」

藤野「何を知ってんだよ、お前が！」

藤野、千沙の椅子を蹴り飛ばす。

室内の視線が集まるが、みなすぐに視線を外す。

藤野「涼しい部屋で婆さんと世間話してるだけ
のやつがよお」

千沙「田中様は……」

藤野「客じゃねーだろ、あれは。つかお前、
敬語がなっていないよな？」

千沙「え？」

藤野「すみませんじゃなくて申し訳ありません
だろ」

千沙「えっと……」

藤野 「さっき俺に言ったことだよ！ すみませんって言っただろうが！」

千沙 「すみ：：申し訳ありません」

藤野 「ほら今、すみませんって言おうとした。婆さんとの電話もなあ、まあ婆さんだからいいけど」

西村 「まあまあ、藤野くん」

西村、藤野の方に肩を乗せる。

西村 「声が大きいよ。少し落ち着きなさい、ね？」

藤野、ふてくされた顔をしながらも、頭を下げる。

藤野 「すみません」

西村 「君が謝る必要はないよ。いつもご苦労様だね。ところで昼飯はもう食べた？」

藤野 「まだです。課長は？」

西村 「僕もまだだよ」

藤野 「あ、じゃあどこか行きませんか？」

西村 「それは僕に奢ってほしいってことかな？」

藤野 「いえ、そんなつもりじゃ……」

西村 「遠慮しなくていいよ。高い店でいいかな？」

藤野 「だから、もお課長」

藤野 と西村、談笑しながら出ていく。

千沙、はっとして鞆の中を見る。つぶれたおにぎりの米粒が、財布やハンカチについていた。

千沙 「あと六時間、あと六時間……」

千沙、椅子に座り机に突っ伏す。

○（回想）千沙のアパート・外観（夜）

千沙の部屋の電気がついている。

○（回想）同・リビング（夜）

テレビを見ている千沙。

佑一、視線をテレビから千沙に向ける。

佑一 「元気ないよな？」

千沙、気づかずテレビを見ている。

佑一 「千沙？ ……千沙！（少し大声で）」

千沙 「えっ？ あ、ごめん、呼んでた？」

佑一 「呼んでた。……元気ない？」

千沙 「え？ あー、大丈夫だよ」

千沙、無理に笑顔を作るがうまく笑えていない。

再びテレビを見つめる千沙。

佑一、不審そうな顔をしながらもテレビに顔を向ける。

佑一 「テレビ、いつ買った？」

千沙 「え？」

佑一 「前来た時、なかったから」

千沙 「あ……なんとなく。お母さんが、暇ならテレビでも見ればって」

佑一 「暇なの？」

千沙 「どうだろ」

佑一 「ライン、既読くらいはつけてほしい」

千沙 「……ごめん」

佑一 「携帯見てない？」

千沙 「最近はずっとテレビだね」

佑一 「面白い？」

千沙 「別に」

佑一 「（小声で）じゃあなんで見てんだよ。時計は？」

千沙 「……」

佑一 「千沙！ 時計は？」

千沙 「あ、ごめん……時計？」

佑一 「俺があげた目覚まし時計、アラームの時間が四時になってる」

千沙 「ああ、この前の日曜日に昼寝したの。寝すぎると夜眠れなくなるから四時にセットして」

佑一 「それから一週間、ずっとそのまま？」

千沙 「……ごめんなさい」

佑一 「謝る必要はないけど」

千沙 「謝る必要……そうかな、謝るべきだったんじゃない？」

佑一 「千沙？」

千沙 「あ、ごめん、何の話してたっけ？」

佑一 「呆れたようにため息をつく。

佑一 「帰る」

千沙「え？」

立ち上がる佑一。

千沙、慌てて立ち上がる。

千沙「ごめん、ごめんって！ 待って」

リビングを出る佑一と、追いかける千沙。

○（回想）同・玄関（夜）

千沙、佑一の腕を掴む。

佑一「おかしいだろ。何があった？」

千沙「何って……」

× × ×

フラッシュ・千沙の会社

椅子を蹴り飛ばす藤野

× × ×

千沙「べつに、何も……」

黙り込む千沙。

佑一、再度ため息をついて歩き出す。

千沙「待って、待って」

千沙が掴んだ腕を振り払う佑一。

佑一「また連絡するから……ごめん、俺も、
頭冷やしたい」

出ていく佑一、閉まる扉の音。

○（回想）同・共用廊下（夜）

部屋の扉を閉める佑一。

× × ×

道路で振り返り、千沙の部屋を見つめる。

正面に向き直り、歩き出す。

○（回想）同・玄関（夜）

佑一が出て行った扉を見つめていた

千沙、振り払われた手を下ろす。

千沙「大丈夫……大丈夫、だいじょうぶ」

千沙、手を胸に当てる。

千沙「頭を冷やすだけ、だいじょう……」

千沙の頬を涙が伝い、うずくまる。

千沙「大丈夫じゃない……じゃないよ……つ

らい」

○（回想）駅・ホーム（朝）

電車を並ぶ列の二番目にいる千沙。
ゲームに夢中になっている前の人の
スマホ画面を見つめる。線路を見つめ、
目線を再びスマホ画面へ。脱出ゲーム
らしく、失敗してゲームキャラクター
が線路に落ちた。
拳を握る千沙の手が前の人の頭が近
づいていく。途中で、肩を掴まれる。
振り返ると、佑一が千沙の肩に手を乗
せていた。

佑一「おはよ、千沙」

千沙、目の色が元に戻る。

千沙「あ、おはよ……あれ？ どうして」

佑一「昨日のこと謝りたくて。会社、午前休
にした」

千沙「昨日？」

佑一、不審そうな顔をして。

佑一「途中で、帰ったから」

千沙「ああ、別に。テレビ見てただけだから」

佑一「テレビ？」

佑一、千沙の肩が震えていることに気づく。

千沙「なに観たかは覚えてないけど、すごくおもしろかったような：あれ、怖かったかな。どんな内容だったっけ？全然、思い出せない」

話してる途中で、佑一が千沙の手を引っ張って歩く。

千沙「え？ 佑くん？」

電車が来る時のアナウンス。

千沙「どこ行くの？ あ、電車」

駅のホームに入る電車。

千沙が振り返るが、両肩を掴まれて再び佑一の方を向く。

佑一「何があった？」

千沙「なに：何も無いよ。それより電車」
焦る表情の千沙、電車の方を見ようと
する。

千沙「遅刻する……遅刻したら怒られて……」

電車、電車乗らなきゃ」

佑一「千沙……千沙！」

大声に驚き、佑一の方を見る千沙。

電車の扉が開き乗客の列が動き出す。

ざわざわした駅の喧噪。

千沙の首筋を汗が伝う。

佑一「おかしいだろ、どうした」

千沙「電車！ 電車乗らないと！」

佑一「は？」

千沙「遅刻しちゃいけないの！」

佑一「今はそんなこと」

千沙「そんなことじゃないでしょ！ 佑くん

社会人なのにそんなこともわからないの？ ああ、そっか、そっちはお休みだもんね、いいよね！ 私は違うの、会社に行かなきゃいけないの！ 普通に会社に行つて普通に……普通の人はね、楽しくなくても仕事しなきゃいけないの、嫌でも会社に行かなきゃいけないの！

わかる？　わかるかなあ、佑くんは普通の人の、私の気持ちだ！」

捲し立てて喋る千沙、茫然と聞く佑一。

千沙が喋り終わると同時に、電車のドアが閉まる。

はっとした千沙、電車に近寄ろうとするが佑一に腕を掴まれる。

佑一「なにしてたんだ、危ない……」

千沙「離して！　乗らなきゃ、遅刻するの！

電車乗らなきゃ会社に」

佑一「大丈夫だから、落ち着け！」

千沙「大丈夫ってなにが？　なにが大丈夫なの？」

佑一「なにって」

千沙「そうだ、タクシー……：そうだよね、外にタクシーいるから大丈夫だよ。ここからどのくらいかかるんだろう。お金持ってたかな……：ああ、ダメだよ、そんなこと気にしてたら。行かないよ」

駅の改札を見つめるが、足が動かない

千沙。

佑一は下唇を噛み、千沙の腕を掴んで
いる手に力を入れる。

千沙「ねえ……腕、痛い」

佑一「……うん、……うん！」

千沙「ああ、違う……痛い、痛くない違う。

どうしよう私……腕より心が痛いかも」

千沙を抱きしめる佑一。

佑一「話聞くから……聞くから、俺が。何が

あった？」

地面に膝をつく千沙と、千沙を抱きし
める佑一。

二人を気にする人もいるが、声をかけ
ることなく去っていった。

○大川クリニック・診察室

向かい合って座っている大川と千沙。

少し沈黙の後、大川が自分のうなじを
撫でる。

大川「新社会人の離職率は年々上がっている

し、珍しいことじゃない」

千沙「……もしかして慰めてくれてます？

大丈夫です、そこはもう改善してるので」

大川「ああ、そうだったね……いや、言わせ
てくれ。君が悪いわけじゃない」

千沙「私も悪いところはありました。って、
今だから言える。あの頃の私には絶対言
えないけど。あなたも悪いから反省しな
さい、なんて」

大川「職場環境の良くない会社は実在するし、
もしそんな会社に就職してしまったら
恥ずかしがらず、逃げる勇気をもってほ
しい……と、僕は思う」

千沙「逃げる勇気か……彼にも言われました、
逃げる勇気を持って」

大川「逃げた先でどうするかだ。振り返った
後で反省して、その後の人生に活かせば
いい」

千沙「ですよ。客観的に、冷静になってみ
ればわかるんだけど……すみません、時

間過ぎてますよね」

時計を確認して立ち上がるとする
千沙、大川がそれを止める。

大川「いいよ、気にしないで」

千沙「でも、診察時間……」

大川「最後の患者さんの話は長く聞く病院なんだ……いや、今日は僕が、最後まで聞きたい」

千沙「……ありがとうございます」

大川「あ、でもちよつと待って」

大川、立ちながら千沙のカルテを整える。
る。

大川「スタッフに先帰っていいって言ってきたかな？ 待ってると思う」

千沙「あ、そうですね、すみません」

大川「ちよつと待っててね」

千沙の資料を抱え、飛び出すように診察室を出る大川。

千沙、小窓から空を見上げる。

千沙「いいところだ……優しい先生だね、

佑くん」

○同・受付

椅子に座っている高木。

大川の声「高木さん、ごめん！」

高木が振り返ると、資料を手に持った

大川の姿。

大川「今対応してる患者さん、もう少しかか
るかも」

高木、ため息をついて。

高木「またですか？」

大川「ごめんね。だからもう上がっていい：

：柿本さんは？」

高木「いつものことだからって、先に帰りま
した」

大川「ああ、それならよかった」

高木「よくないですよ！」

高木、立ち上がって大川に詰め寄る。

たじろぐ大川。

高木「入ったばかりの私が口出しすることじ

やありませんが、先生は働きすぎです」

大川 「はい、はい……」

高木 「体壊しますよ、ほんと。いくら患者さんのためとはいえ、そこまでする必要ありません？」

大川 「今日の件は患者さんじゃなくて僕が聞きたいのもあるからなあ」

高木 「はい？」

大川 「何でもないです、ごめんなさい」
ため息をつく高木。

高木 「時間は時間できちんと区切りをつけるべきです。先生のそれは優しさではないですからね？」

大川 「そうかなあ？ 患者さんには優しいって言われるけど」

資料を見ながら話していた大川。

高木、大川から資料を奪い取る。

高木 「患者さんにとっては、でしょう？ 先生はもっと、自分に優しくしてください」

資料を大川に突き返す高木。

高木「患者さん女性ですよ。お弁当持ってきてるので、ここで食べていいですか？」

大川「お弁当？　高木さんが作ったの？」

高木「食いつく所そこ！？」

大川「ごめんね、ありがとう」

高木「：：勘違いされているようですが自分の、私のお弁当ですよ？」

大川「え？　あ、ごめんごめん。いーよいーよ、食べて食べて」

高木「その前に、探してるのはその患者さんの過去データですか？」

大川「：：へ？」

高木「その患者さんに関連する過去のデータを探しに来たんでしょ？　私やりますから、先生は患者さんのところへ戻ってください」

大川「高木さん：：！」

高木「言っておくけど患者さんのためじゃありませんよ！　先生のためです！」

大川「ありがとう、本当に。あ、過去のデー

タっていか、槇くんの、槇佑一さんの
カルテを」

高木「はいはい、わかりました」

大川「ごめんね。ありがとね、本当に」

高木「いいから！ 早く戻って！」

大川「はいっ！」

大川、受付を出る。

高木、ため息をついて過去のデータを
探す。「槇佑一」で検索、一件のデータ
がヒットしたところで、出入り口のド
アが開いて人影が現れる。
動揺する高木だが、取り繕って人影に
頭を下げる。

高木「申し訳ありません、午前の診察は終了
しております。それと、当院は完全予
約制の……」

説明をする高木。

受付に近づく人影の後ろ姿。

○（回想） 駅・ホーム（夕）

歩廊に立っている佑一の後ろ姿。

薄手の秋服になっている。

千沙の声「佑くん、おはよう」

はっとして振り返る佑一。

後ろにいたのは千沙ではなく、永田だった。

永田「あなたの乗る電車まだでしょ、何してんの？」

佑一「……なんだ、永田さんか」

永田「心の声が漏れてるぞ、佑一」

佑一「その呼び方やめてくださいって。外回りですか？」

永田「私も早退。体調不良で帰った後輩が心配で、早めに仕事切り上げて追いかけて来た」

佑一「へえ……本当の理由は？」

永田「子供が熱出してお迎え。今日、旦那いないから」

佑一「普段は旦那さんが送り迎えしてくれるんですけどっけ？」

永田 「自由業だからね、旦那」

佑一 「優しいですね」

永田 「見習いなさい、うちの旦那を」

佑一 「さりげなく惚気ないでくださいよ。：

：そっか、子供が出来たらそういうことも考えなきやいけないのか」

意味深にため息をつく佑一を、好奇の目で見る永田。

永田 「なにになに？ プロポーズしたの？」

佑一 「まだしてませんって：：俺、彼女がいること言いましたっけ？」

永田 「就活生に手垢つけといてまんまと彼女にしたんでしょ？ 営業課では有名な話だけど」

佑一 「え、ちょ、待っ：：いろいろ誤解があります」

永田 「就活生に声かけたのは間違っていないでしょ？」

佑一 「最初に声かけたのは俺じゃない、向こうです！」

永田「どっちもどっち」

佑一「ていうか、その話誰から聞きました？」

永田「誰だったっけ？ 飲み会で酔っ払って

自分で言ったんじゃない？」

佑一「そんなこと……ありえなくもない……

飲むのやめようかな、もう」

永田「お酒弱いからなあ、佑一は。結婚式に

は呼んでね」

佑一「……どうかな」

永田「なになに、身内だけ婚？ ご祝儀だけ

よこせて？」

佑一「言ってますんって、そんなこと。あ、

電車来ますよ」

電車がホームに入り強い風が吹く。

佑一「結婚式ですけど」

永田「え、なに？（電車の音で聞こえない」

佑一「呼ばないじゃなくて、呼べないかもで

す。千沙、そういうの無理そうだし」

永田「ごめん、聞こえない……電車来たから

あとで」

電車に乗り込む永田。

永田「後で連絡する！ いや、慎んで返信遅

い……明日また話聞くから！」

笑顔で見送っていた佑一、電車が発車すると同時に真顔になる。

佑一「明日、土曜日だけだな。連絡も……千

沙がいるから、返しづらいなだよな」

携帯を取り出す佑一。画面を見てため息をつき、再び遠くを見つめる。

画面には千沙からのメッセージ

「待ってる。早く来て」

表示された時刻は三時四十分。

○（回想）千沙のアパート・外観（夜）

千沙の部屋、電気がついていない。

○（回想）同・玄関（夜）

真っ暗なところに電気が付く。

佑一、靴を抜いて廊下上がる。

佑一「ちさー？ 電気はつけるっていつも言

ってるだろ？ 飯食った？」

廊下を歩く佑一。

○（回想）同・リビング（夜）

佑一が電気をつけると、ソファの上で毛布にくるまっている千沙の姿。

佑一、食材が入った買い物袋をキッチンの上に置く。

動かない千沙を見つめる佑一、食材をキッチンに並べる。

佑一「いろいろ買って来たんだけどさー、なに食べたい？」

千沙「……いらない」

佑一「ハンバーグでも作るか」

千沙「ハンバーグは好き」

佑一「そうか、ならよかった」

佑一、ローテーブルの上にあったりモコンでテレビを付ける。

毛布にくるまったまま動かない千沙。

佑一、キッチンに戻って材料を切り始

める。

佑一「会社は？」

千沙「明日は行く」

佑一「明日、土曜日」

千沙「そっか、ならお休みだ……明日お休み

だから早退したんだった」

佑一「大丈夫だった？」

千沙「うん。藤野さん、夕方帰ってくるって

聞いたから。課長は嫌な顔してたけど、

私だって嫌だった」

佑一「嫌なことは無理しなくていいよ」

千沙「そうだよ、嫌なことは無理しなくて

いいよね」

佑一、手を止めて千沙の方を見る。

佑一「あのさ、千沙」

千沙「そうだよ、嫌な時は逃げていい、仕方

ないもん。土日挟むから藤野さんも私が

帰ったことなんて覚えてないよね……

ね？」

振り返る千沙。

佑一、軽くうなづく。

千沙「だよね、よかった……本当に？ 本当

に覚えてないかな？」

佑一、食材を切っている。

千沙「私、早退してよかったかな。大丈夫だ

ったかな？ もしかして今頃、藤野さん

帰ってきて怒ってる……携帯、電話……

ライン」

ザクと食材の切れる音。

千沙、顔面蒼白になってテーブルにあ

る携帯に手を伸ばす。指が触れる直前

で、佑一が千沙の手を掴む。

佑一「見なくていい」

千沙、佑一のほうを見る。

佑一の目線、千沙を見れていない。

佑一「今の千沙は会社とは関係ない、普通の

千沙だから」

千沙「普通の私、ってなに？」

佑一「……俺の彼女の、普通の奏千沙」

千沙「普通……普通ってなんだろう？」

佑一「だから……えっと」

千沙「普通の人には会社さぼらないよね？　ち

ゃんと行くよね？　私って普通？」

佑一「だから今は、会社は関係ない」

千沙「私、佑くんの彼女としてちゃんとやれ
てる？」

佑一「は？」

千沙「ちゃんと彼女できてるかな？　変じや
ない？　ちゃんとしてる？」

佑一「ちゃんとしてる……してるから！」

佑一の大声に驚く千沙だが、佑一自身
もはっとして頭を抱える。

佑一「ごめん……ごめん」

千沙「私のほうが、ごめんなさい……」

気まずくて互いに下を向くが、千沙が
何かを思いついたようにキッチンを
見る。

千沙「ハンバーグ作るの、手伝う」

佑一「え？　あ、ああ……」

千沙「手伝うっておかしいよね。私の家なの

に。一緒に作ろう、ね？」

千沙、先ほどとは違い笑顔で明るい雰
囲気。

千沙「材料ありがとう。いくらだった？」

佑一「いいよ、別に」

千沙「ダメだよ、ちゃんと払う……」

佑一「いいって言ってるだろ！」

怒鳴り声に振り返る千沙、表情がこわ
ばっている。

佑一、目を見開いて俯く。

佑一「ごめん……」

千沙「ううん、私がしつこかったから。ご飯、
私作るね」

佑一「あ、いや待って、俺も作る」

佑一、千沙の後を追ってキッチンへ。

○（回想）佑一の会社・休憩室

佑一と永田が同じソファに並んで座
っている。冬服

永田の手には飲みかけの缶珈琲、暖を

取っている。

佑一の前にあるテーブルにも缶珈琲。

永田「それ、病院行った方がいいでしょ」

佑一「病院？」

永田「普通の病院じゃなくて、心のほうね」

佑一「：：普通って何ですかね？」

永田「普通かあ：：例えは今、槇と私はこうして仕事さぼって一緒に珈琲飲んでる。で、」

永田、飲みかけの缶珈琲を佑一に差し出す。

佑一、不思議そうな顔をするが受け取らない。

永田「もしここでこれを受け取って、私の飲みかけ缶珈琲を飲むとする。それって普通だと思う？」

佑一「普通、ではないですよね？」

永田「じゃあ普通ってなに？」

佑一「え？」

永田「ほら、じゃあ、普通の行動してみて」

佑一「……（缶珈琲を見つめて悩む）」

永田「やめてくださいって突き返す？　いつ

たん受け取って後で飲む？　そのまま

捨てる？」

佑一「……自分で飲んでください」

佑一、正面に向き直って自分の缶珈琲
を飲む。

永田「それが正解？　槇にとってそれが普
通？」

佑一「……なんですか、これ」

永田「あんたが飲んでるその缶珈琲、私が買
ったんだけど？」

佑一、缶の飲み口を離して缶珈琲を見
つめる。

視線を永田へ。

佑一「ありがとうございます」

永田「でも、相談があるって話しかけてきた
のはそっちよね？」

佑一「……はい」

永田「そしたら普通、声かけた槇が奢るべき

じゃない？ 私が先輩だから私が奢るのが普通？ この場合、どっちの普通が正解？」

佑一「………」

永田、椅子に座り直して缶珈琲を一口飲む。

永田「なんの話してんだろ、って思ってるでしょ？」

佑一「はい」

永田「それと一緒によ。私からしたら先輩の私が奢るのが普通、でも榎からしたら声をかけた榎が奢るのが普通……って、思ってる？」

佑一「思ってます、思ってますよお。気が利かなくてすみません、ほんと」

永田「どうでもいいわよ、そこは。榎の気持ちもわかるし。あと、私が後輩で奢られる立場だったら、先輩が奢らなきゃいけないなんてルールない、そんなことを普通にしたくないって思うだろうけどさ」

佑一「立場が変われば、か。難しいですね」

永田「ねー？ だからさ、時と場合によつて

違うし価値観も人それぞれだし？ 自

分はそれが正解だと思う、それが普通と

思ったらそれでいいんじゃない？ そ

もそも、こんなこと深く考えんな」

永田、テーブルの上に缶珈琲を置く。

永田「一人で考えるだけならいいけど、他人

を絡めて誰かと比較するようになった

らすぐやめな。病むよ、本当に」

佑一「……哲学ですね」

永田「哲学っていうより病気でしょ。最近多

いみたいね、そういうの」

佑一「多いのか……」

永田「まあ、基本的には自分を信じていいん

だけど、相手に合わせなきゃいけない場

面もあるよ？」

佑一「ああ、はい、わかっています。一応俺、

営業職なんで」

永田「それは仕事として、一時的に表面上相

手を理解するってことでしょ。そうじゃなくて、大切にしたい人の価値観に寄り添うってこと。一緒にいたい、同じ時間を過ごしたい、守りたい。そう思う相手とはちゃんと、正義とか普通とか、そういう価値観を合わせるべきだと思う」

永田「ソファから立ち上がる。」

永田の缶珈琲はテーブルの上に残されていている。

永田「話しなさい、彼女と。疲れたらまた、話聞いてあげるから」

佑一「……ありがとうございます」

永田「でことで私、先に戻るけど、それよろしくね」

永田の指さす方向には、蓋の開いた缶珈琲。

佑一「あ、捨てときます」

永田「ううん、そうじゃなくて。残りよろしくってこと」

佑一「……はい？」

永田「残すのもったいないよね、じゃあどうする？ 飲んじやう？ 捨てる？」

佑一「中身まだあるんですか？」

永田「普通だったらどうするか、自分だったらどうするか、考えてみなさい」

佑一「ええー：：いやさつき、深く考えるな
って」

永田「解決したら戻ってきていいよ。まあその間、あんた仕事できなくて後から大変になるけどね。あ、今日課長デスクにいるよね、目つけられるかもね」

佑一「え、それは困る：：」

永田「私このあと外だから、また明日ね」

佑一「いや、今日金曜だから明日休み：：」
休憩室を出ていく永田。

佑一、椅子に座り直して缶珈琲を見つめる。

佑一「うっそ、嘘だろ。なに言ってるのあの

人：：先輩の飲みかけ缶珈琲を飲むか捨てるか？ 普通の人ってこういう時

…だからそれを、俺基準に考えるんだ
って。千沙はこういう時どうするだろ？
ていうかこれ、千沙が知ったら…」

佑一、珈琲を捨てようと缶を掴むが思
ったより軽くて中身を覗き込む。

佑一「空かよ…：悩む必要なかった」
ソファにもたれかかる佑一。
自分の缶珈琲を掴み、暖を取る。

○大川クリニック・診察室

小窓の外にある空を見ている千沙。

物音がして振り返ると、ドアの前に大
川がいた。

大川「遅くなってごめんね、お待たせ」

千沙「いえ。大丈夫でした？」

大川「先月入った受付の子がいい子でね、残
っててくれるって」

千沙「すみません」

大川「…：奏さんはまず、ごめんなさいをや
めようか」

千沙「え？」

大川「癖になってるよね、すみませんとごめんなさい」

千沙「……あ」

大川「謝罪の言葉を口にするだけで楽になる気持ちもあるけどね。でも、自分が悪いって思うとしんどいでしょ？」

千沙「すみませ……えっと」

大川「うん、あと、癖になったら単なる言葉になるから」

千沙「？」

大川「心がこもってない、単なる言葉。今の謝罪は本当に謝ってるのか、それとも癖で言ったただけなのか。そんな風に勘繰られたくないでしょ？」

千沙「……はい」

大川「まあ、深く気にしなくていいよ。気楽に、なんとなく意識してみて」

千沙「はい」

高木の声「失礼します」

ドアが開き、資料を持った高木が入ってくる。

高木「診察中に申し訳ありません。先生、ちよつと」

大川「あ、えつと……」

大川、ちらつと千沙を見る。

千沙「大丈夫ですよ、私は」

大川「ごめんね。少しだけ、もう少しだけ待ってて」

診察室を出る大川と高木。

○同・廊下

資料を見ている大川、千沙のカルテの後ろに「榎佑一」のカルテがあることに気が付く。

大川「ありがとう、高木さん……本当にありがとう」

高木「それはいいんです。それより先ほど、予約なしの患者さんが来られました」

大川「再診？」

高木「いえ、新規……かな、と思いました。
診察券持ってなかったのですね」

大川「どんな感じだった？ ああ、いや、高木さんにはわからないか」

高木「申し訳ありません。来週またお越しくださいって追い返しちゃいました」

大川「カルテを探る手を止めて高木を見る。」

大川「仕方ないよ。うちは完全予約制って、表の看板にも書いてるしね」

高木「いえ、あの、それが……」

大川「あ、でも再診なら僕が対応するから、待っててもらって」

高木「申し訳ありません」

大川「いいよいいよ。それより、奏さん待たせてるから、もう行くね」

高木「え？ あの、先生……」

大川「これ、ありがとうね」

佑一のカルテを高木に返し、診察室へ戻る大川。

高木「どうしよう、言えなかった」

佑一のカルテ、顔写真を見る高木。

× × ×

フラッシュ・待合室

来客（佑一）の後ろ姿。

対応をしている高木。

× × ×

高木「似てるというか本人よね、やっぱり」

○（回想）駅・ホーム

晴れた空を見上げている佑一。

近づいてくる人影。

永田の声「別れなさい、もう」

振り返る佑一、目が虚ろで永田の姿を

捉えられていない。

永田「なんだ、永田さんかあって思った？」

佑一「いえ……思っ
てません」

永田「……」

佑一「別に何も、思っ
てませんよ」

永田、佑一の隣に立つ。

永田 「移動になってからもちよいちよい休んでるみたいね。総務課居心地悪い？」

佑一 「そういうわけじゃないです。会社は：
：何も」

永田 「この後、時間ある？」

佑一 「え？」

永田 「ご飯いかない？奢るから」

佑一 「お子さんのお迎えは？」

永田 「旦那いるから大丈夫。今日は本当に、
可愛い後輩が心配でついてきたの」

佑一 「永田さん抜けたら困るでしょ」

永田 「知るか、そんなもん。ちよっと抜けた
くらいで困るような会社が悪い。明日急
に、死んでいなくなることだってあるん
だから」

佑一 「相変わらず気が強いなあ。行きました
よ、病院」

永田 「え？行ったの？」

佑一 「大丈夫、一緒に治していきましょう。

元気になりましたよ、って」

永田「そう、よかった。専門の先生に診てもらってるなら安心ね……一緒に治して？　元気になりましょう？」

佑一「睡眠導入剤ってあんま効かないですね。

全然寝れないですもん、夜」

永田「ちよ、ちよっと待って……病院って彼女が通ってるのよね？　病気なのは彼女だったもんね？」

佑一、永田を見つめる。目の焦点があつていないような、虚ろな雰囲気。

佑一「永田さん俺、ちゃんとやれています？」

永田「え？」

佑一「ちゃんと社会人演じれています？　今の俺、変な所ないですよね？　俺ちゃんと、普通の人間として生きてます？　」
目を見開く永田、佑一の腕を掴み歩廊を歩く。

永田「病院ってどこ？　どこの病院行ってる？」

佑一「どこってすぐその、駅出てすぐの」

永田「待って、私そういうの専門じゃない。
ちよつと待って、ええつと」

佑一「手、離してもらっていいですか？ 俺
今から、彼女のところ行かなきゃいけない
ので」

永田「はあ？」

佑一「毎週金曜は会社早退してるんです、彼
女。だから俺も、早く帰っていかない」と

永田「その女のせいでしょ！」

永田、佑一の腕を離して正面から向き
合う。

永田「何してんの、あんた……引きずられて
んじゃない。なんでそんな事になるまで放
っておいた……違う、なんで彼女に付き
合ってるの？ もっと自分を大事にし
なよ。自分の生活を一番に」

佑一「わかってますよ！」

佑一の怒鳴り声に永田、軽く身を引く。

佑一、息を整えてから。

佑一「わかってます、よくないって。俺のせ

いで他の人に迷惑かけてる、俺のせいだ
けど元をたどれば千沙のせいだ、千沙が
悪いって……そんな風に思いたくなか
った。でも俺がいなくなったら千沙は一
人になるから……俺には永田さんや友
達やいろんな人がいるけど千沙には「

佑一、目を抑えてうなだれる。

佑一「もう、どうしたらいいか、わからなく
なっていたんです」

○（回想）千沙のアパート・部屋

佑一、千沙にスマホ画面を見せる。精
神科病院や電話相談の番号。

佑一の声「頑張ってたんです、俺なりに」

千沙、首を横に振る。

佑一の声「でも千沙は嫌だって。精神科なん
てそんなところいけない、行く必要ない、
誰かに見られたら困るって」

千沙、笑顔を作って立ち上がる。

佑一の声「自力で治すから大丈夫、ほらみて

こんなに元気だよって」

キッチンで料理する千沙を見つめる

佑一、携帯を強く握りしめる。

佑一の声「本当に、時々元気なんですよ。飯

はほとんど俺が作るけど。掃除もしてる

し：：いや、ほぼ俺がやってますね」

× × ×

掃除機をかけていた佑一、手を止めて

ソファに寝転んでテレビを見ている

千沙を見る。

佑一の声「で、途中で気づいたんです。ああ

これ違う、千沙のこれは俺とは違うって」

× × ×

出社する千沙を見送る佑一。携帯を取

り出し、同僚に休むと連絡を送る。

佑一、千沙の部屋を見渡す。

佑一の声「会社のことを何とかしようって気

は千沙にない。俺に甘えたいだけなんだ

って、自分がこうなって気づきました」

× × ×

菓の処方箋を握り潰しゴミ箱に入れる佑一。「大川クリニック」の文字が見えている。

佑一の声「共存って言葉を、その時に知り
ました」

○（回想）ファーストフード店（夕）

向かい合う席に座る佑一と永田。

佑一「千沙は俺にすがってる、依存してるだけなんだって」

永田、何かを喋ろうとするが何も言えない。

佑一「缶珈琲、捨てようと思ったんです、あの時」

永田「缶珈琲？」

佑一「先月、休憩室で。永田さん俺に言ったでしょ？ 飲みかけの缶珈琲をどうするか、考えろって」

永田「ああ……悩む必要ななかったでしょ？」

佑一「（笑って）空だとは思いませんでした。
：：：そうですね、悩む必要なんてなかつ
た」

永田「でも、考えて答え出したんだ？」

佑一「あの時はすぐに答えが出ました。もつ
たいないけど俺が口をつけたら千沙に
悪いから捨てようって。普通とか常識と
かそういうのどうでもよくて、千沙のた
めに決断しました。でも今は、迷うと思
います」

テーブルの上にある珈琲を見つめる

佑一。

永田も自分の珈琲を見つめる。

佑一「千沙がどう思おうと世間の常識を大切
にしたい、変な事をしたくない、周りか
ら嫌われたくない、普通だと思われたい
って。最近はそのばかり考えてます」

佑一、自分の珈琲を飲む。

カップを机に置き、椅子にもたれかか
る。

佑一「永田さん、俺、酷いやつだと思えますか？」

永田「思わない、思うわけない。楨は頑張った：：あ、頑張れって言っちゃいけないんだっけ？ えっと：：偉いよ、ちゃんと答えを出せて。自分の正義とか常識とか、ちゃんと考えてて偉い。自分と会話できて偉い」

佑一「説得力あるなあ、永田さんが言うと」

永田「ねえ、楨。これ、私が言うべきじゃないかもだけど。さっきも言ったけど、あんた彼女と」

佑一「わかってます」

永田の言葉を遮った佑一。
少しだけ微笑み、永田を見つめる。

佑一「珈琲、飲まないんですか？」

永田「え？ あ、ああ：：」

佑一「一口飲んだらそれ、交換しません？」

永田「交換？」

佑一、自分の珈琲カップを永田の方へ

寄せる。

佑一「確かめたいんです、もう一度。今の俺ならどうするか、って」

永田「二つの珈琲を見つめる。」

永田「わかった」

珈琲を一口飲んだ永田、カップを佑一の方へ寄せる。

佑一「合図とかします？」

永田「そっちに任せる。言っとくけど私はもう、答え決まってるからね」

佑一「知ってますよ。惚気ちやうくらい優しい旦那さんと、可愛い後輩より可愛い息子さんがいますもんね、あ、でもこれ、旦那さんに悪いですかね？ 永田さんの飲みかけを俺が飲むって」

永田「確かに……じゃあ、手に取るだけにしよう。カップに手をつけたら、飲んだってこと」

佑一「了解です。カップを掴んだら俺は自分に優しくする、自分のことを一番に考え

る」

永田「もし、掴めなかったら」

佑一「もう少し、頑張ってみます」

永田「そんな状態で？　すでにぐずぐずなのに？　彼女と心中するの？」

佑一「それもいいですね。：：：そうですね、ここで間違えればきっともう、俺にも千沙にも未来はない。決まりました、いきます」

腕まくりをする佑一。

二人とも珈琲のカップを見つめる。

佑一「いっせーのーで」

○（回想）千沙のアパート・リビング（夜）

ソファの上で毛布にくるまっている

千沙、テレビを見ている。

物音、振り返って毛布をかぶる。

部屋の電気が付き、佑一が入ってくる。

佑一「電気はつけろって、本当。目悪くなる

ぞ」

千沙「遅かったね、今日。忙しかったの？」

佑一「あー、うん」

佑一「買ってきた総菜やレトルト食品を冷蔵庫に詰めていく。

いつもと違う商品を不思議に思い、冷蔵庫を見つめる千沙。

空っぽだった冷蔵庫に、レトルト食品が詰め込まれていく。

佑一「会社の先輩と飯食ってた、さっきまで」

千沙「……え？」

佑一「千沙の弁当ここ置いとくから、早めに食えよ。あ、冷蔵庫入れといたほうがいい？」

千沙「え、待ってまって……お弁当？」

佑一「ハンバーグ好きだろ、それにしといたから。二割引きだけど」

千沙「そうじゃなくて……会社の先輩とご飯食べてきたの？」

佑一「ああ、ハンバーガーとポテトだけだから夜中に腹減るかも……いや、減らない

かな、どうかかな」

千沙 「あ、会社帰りに誘われた感じ？ 断れ
なかつたんでしょ？」

佑一 「……千沙さあ、会社やめなよ」

千沙 「……え？」

佑一、冷蔵庫を閉めて振り返る。

佑一 「会社、やめていいと思う」

千沙 「なに、急に」

佑一 「急じゃないだろ。ずっとそれが苦痛になつてたじゃん」

千沙 「いや、でも……え？ 私、頑張ってる

よ？」

佑一 「何を？」

千沙 「なに……えっと、我慢して、暴言にも耐えて」

佑一 「それは頑張らなくていい事だと思う、おかしいって叫んで、叫べないなら会社辞めて……逃げていいと思う」

千沙 「やめれるわけないでしょ。就活だつて大変だつたんだから。なかなか決まらな

くて、やっと受かって……」

佑一「それでも、その会社は千沙に合わなかった。タイミングが悪かったんだと思う、もう一回就活してもいいし、気になるなら休職して次のところ探せば？」

千沙「そ、んな無責任な事できない……」

佑一「合っていない、ちゃんと仕事できてないのにダラダラ居座る方が無責任だと思うけど」

千沙「ダラダラ居座ってない！ 頑張ってる！ ……え、どうしたの、今日。なんでそんなに冷たいの？ いつももの佑くんに戻ってよ……そうだよ、いつも話聞いてくれるでしょ、だから私は大丈夫、佑くんがいるから……」

佑一「千沙、俺は何もできないよ」

千沙「……」

佑一「会社でいじめられても助けてやれない。

そこは千沙が自分で頑張るしかないけど……半年経っても無理だった、自分で

何とかできなかつただろ？」

千沙「知ったような口きかないでよ！ 見て
なくせに！」

佑一「ああ、そうだな、見てない。だから、
知らないから俺には何もできない」

千沙「っ：：まあって、違う。大丈夫だから：
：仕事が嫌でも佑くんがいるから、話聞
いて、傍にいてくれるだけで心軽くなる
から：：」

佑一「逆だよ」

千沙「え？」

佑一「俺のせいで千沙は体が重くなってる。
自分の足で歩けなくなってる」

千沙「：：：どういうこと？」

○大川クリニック・診察室

涙ぐみながら話をする千沙。

千沙「彼が言っていました、私と彼は病気の
種類が違うって。私がそれをちゃんと理
解したのは、こうして冷静になって、物

語として過去のことを振り返れた後で
した」

× × ×

回想・ファーストフード店

永田と向かい合って珈琲カップを見
つめている佑一。

佑一の合図で、カップに手を伸ばす。

千沙の声「もしあの時、彼が選択を間違えて
いたら、私達は二人とも潰れていた」

永田の珈琲カップを掴んだ佑一、永田
と目配せし、反対の手で顔を覆って小
さく笑う。

頬を涙が伝っている。

× × ×

回想・住宅街道路（夜）

携帯の画面を見つめる佑一。

千沙にメッセージを送った後、携帯を
ポケットに収め歩き出す。

千沙の声「彼に依存することでは、押しつ
ぶすまでに寄りかかることでは、か自我

を保てない私と、責任感と罪悪感で私を
突き離せず、自分を犠牲にしてしま
う
彼と」

× × ×

千沙の頬を伝う涙を、黙ってみている

大川。

千沙「あの夜、彼が私を叱ってくれなければ
：：：どん底まで突き放して完全に一人
ぼっちにしてくれなければ、私はぬるま
湯につかったままできつと、今もずっと、
自分の足で歩けないでいた」

○（回想）千沙のアパート・リビング（夜）

キッチンにいる佑一と、ソファに座り

佑一の方へ体を向けている千沙。

佑一、千沙のいるソファへ歩く。

佑一「千沙、別れよう」

千沙「：：：え？」

中腰になり、千沙の目線に合わせる佑
一。

千沙 「別れるって、なに？ え？ どうして

急に」

佑一 「急じゃない、ずっと思ってた…けど、

千沙 にとっては急だな、ごめん」

千沙 「まって…」

佑一 「いや、急じゃない…その傾向はあつ

たよな、気づいてた？」

千沙 「いや…まって…」

佑一 「気づいてないよな。俺のほう見てなか

ったもんな、千沙は」

千沙 「うそ、待ってまって」

佑一 「俺なんてみてなかった、俺じゃなくて

もよかった」

千沙 「うるさい、黙って！」

佑一 「…」

千沙 「嘘でしょ、嘘だよね？」

佑一 「嘘ついてるように見える？」

千沙 「見えないけど、でも！ 無理、無理無

理無理！ だって私いまこんな状態だ

よ？ 会社つらくて、金曜日はいつも早退して」

佑一「俺もだよ」

千沙「……え？」

佑一「俺は金曜どころじゃない、週の半分は出社できてなかった。役に立たなくて、部署も移動になった」

千沙「え、いつ……いつから？」

佑一「二か月前、クリスマスの後」

千沙「言ってよ。言ってくれたら私だって」

佑一「私だって何した？ 家事してた？ 俺

のこと見てくれた？」

千沙「見てた……んだけど」

佑一「飯食い終わった後、俺が菓飲んでるの知ってた？」

千沙「……時々、サプリみたいな飲んでるなああって思ってたけど」

佑一「ふわっとしてるな」

佑一、苦笑いで立ち上がる。

鞆の中から処方箋を取り出し、テーブル

ルに置く。

佑一「飲まないよりはマシってレベルかもしれないけど、気休めにはなってる」

千沙「薬……？」

佑一「千沙、病院いこう」

千沙「千沙、目を見開いて佑一を見上げる。

千沙「大丈夫、私そんなじゃない」

佑一「会社のこと、友達や家族には？ やっ

ぱり相談できない？」

千沙「だって言っても、社会人ってそんなも

のって言われるだけだし。友達には……

言えない」

佑一「俺が今通つてるところ、先生が優しいん

だ。病院じゃなくても電話とか、そうい

う相談できる所ある」

千沙「……そういう所に、行かせたいの？」

佑一「行ってほしい。俺はもう、千沙の手を

掴めないから」

千沙「首を横に振る。

千沙「いや……いやだ、捨てないで」

佑一「ごめん」

千沙「勝手なこと言わないでよ！　今まで優しくしてくれたじゃない。勝手だよ、勝手すぎる……自分が耐え切れなくなつたからって、そんな理由で……」

自分の言葉にはっとした千沙、目を見開いて佑一を見つめる。

佑一「ダメかな、俺が自分に優しくするのは。俺が自分を大切にしたいと思うのは千沙にとって悪いこと？　普通じゃない？」

千沙「違う……違う、違うけど。でもじゃあ、私はどうしたらいい？　佑くんがいなくなったら私、一人になっちゃう。こんな状態で……こんなに苦しいのに誰もいなくなるなんて。一人になるなんて、耐えられない」

佑一「一人にならなければいい」

千沙「どうやって？　私がこういう状態だつて知ってるのは佑くんだけだよ。佑くん

がいなくなったら、私」

佑一「千沙はどうしたい？」

千沙「……別れたくない」

佑一「俺を頼りにしないで。俺がいなくなっ

た後、千沙はどうしたい？」

千沙「……生きていけない。死にたい……い

やだ、もう嫌だ！ 佑くんいないなら、

私もう……」

佑一「俺に依存するな、千沙！」

佑一、千沙の肩を掴む。

佑一「俺だけに依存するな。助けられる人

を探せ、居場所を見つけろ」

千沙「無理……そんな人いない」

佑一「探すんだ、見つけるんだよ、自分で」

千沙「だから！ どうやって！」

佑一「病院いけって言っただろ！ 手を伸ば

せ、千沙！」

佑一が怒鳴った拍子に、処方箋が床に

落ちる。

佑一「助けてって叫べ、苦しって素直に声

を出せ。俺みたいになあなあにして結局逃げ出すような男にじゃなくてちゃんとそれ専門の、手を掴んでくれる人の所へ助けを求めろ。大丈夫、掴んでくれる人はいる」

千沙「それが、病院ってこと？」

佑一「病院と相談窓口のリスト、置いて帰るから」

千沙「置いて帰る……本当に、もうお別れなんだね」

佑一「……ごめん」

千沙「どうしよう私、信じられない。この話終わって佑くん帰って、でも明日の朝、時間ずらして同じ電車に乗ってくれて……ごめんって、謝ってくれること期待してる」

佑一「それはない、絶対はない」

千沙「うん……わかる。私がいくら馬鹿でも、最近佑くんを見てなかったとしても、それはわかる。佑くんもう、決めてる」

膝に顔をうずめて泣き出す千沙。

佑一、千沙に手を伸ばすが触れずに引
つ込める。

佑一「後から思えば、千沙、俺に助けを求め
てたよな」

千沙「？」

佑一「会社が忙しいとかいろいろあるとか、
そんなこと言ってたよな。俺が振り払っ
た、俺が千沙の手を拒んだ……気づけな
くてごめん。今度はちゃんと、掴んでく
れる人の所へ手を伸ばしてほしい」

千沙「……ごめんなさい」

佑一「なんで今謝る……なんで今さら、謝る
んだよ」

佑一の目から涙が落ちる。

涙を拭い、千沙を見る佑一。

佑一「千沙、逃げる事は悪い事じゃないよ、
嫌なら嫌ってちゃんと言え。もしそれが
言えないなら、どうしても無理なら今回
は逃げる。まだ間に合う、まだやり直せ

る。人生やり直せる今のうちにたくさん失敗して、逃げなくていい方法見つけろ」

千沙「……逃げていいってのは、自分に言い聞かせてる？」

佑一「そうかも。俺も、もしかた千沙に会えたら、今度は逃げたくない。逃げなくていい方法を、見つけておきたい。今度こそ千沙を支えたい」

千沙「今それ言う？ 別れるんでしょ、私たち」

佑一「……ごめん」

千沙「そういう優しすぎるところが、よくないと思う」

佑一「ああ、そうだな。直しておく」

千沙「あと顔がかっこいいところも、どうかと思う」

佑一「は？ え、なに？」

千沙「会社に女の人いるでしょ？ 永田明美さん？」

佑一「え、ああ。会社の先輩」

千沙「ライン来るたびにうわあーって思った。どんな人だろ、佑くん狙われてないかな、会社でもてるだろうな、かつこいいもんなあつて」

佑一「いや、会社では……」

千沙「ごめん、もう別れるのに、変な事言ってる」

佑一「あのさ、千沙……俺の顔、忘れないでほしいんだけど」

千沙「？」

佑一「もしまたどこかで……どこかで偶然、会えたら、声をかけていいかな？ 千沙に言ってなかったことがあるんだ。言わなきゃずっと思ってたんだけど」

千沙「なに？」

佑一「今は言わない」

千沙「え、なにそれ……じゃあどうして今、その話したの？」

佑一「だからごめんって……えーと、だから、街で声かけても変な人ってならないよ

うに、俺の顔覚えておいてほしい」

千沙「忘れるわけないよ……忘れるわけないでしょ」

佑一「どうか。千沙は人の顔覚えるの、苦手だから」

千沙「また、会える？」

佑一「また会いたい……逃げてごめん」

千沙「優しいから。佑くんは優しいから、私に酷いこと言えない、嫌だつて言えなかつたんでしょ。それならもう、逃げるしかないよ」

佑一「ごめん……俺のこれは、優しさとは違うな」

千沙「治るといいね、お互い。克服するといね、苦手を……次会ったときはもう、逃げなくていいように」

佑一「ああ、うん……たくさん失敗して、たくさんいろんな経験しておく……またな、千沙」

佑一が伸ばした手を掴む千沙。

佑一「頑張れ……って、あえて言う。千沙にはそれがいいと思うから……頑張れ、千沙。大丈夫、大丈夫、頑張れ」

千沙「大丈夫だいじょうぶ、大丈夫。頑張れ、頑張れ」

強く握った手を、どちらからともなく離す。

佑一「じゃあ」

千沙「うん」

佑一「また……また会えたら」

千沙「うん……」

佑一「またな、千沙」

リビングを出ていく佑一。

千沙が手を伸ばすが、部屋に響いたのは扉の閉まる音だけだった。

○（回想）住宅街・道路（夜）

歩いている佑一、徐々にスピードが速くなり走り出す。

× × ×

公園入口のようなところで立ち止まった佑一。

佑一「大丈夫……大丈夫、大丈夫……頑張れ、

頑張れ俺……頑張れ、千沙」

顔を上げて空を見上げ、涙を流す。

○（回想）千沙のアパート・リビング（夜）

伸ばした手を下ろす千沙。

千沙「また、なんてそんなこと言わないでよ

……最後の言葉にしないでよ」

下ろした手を口元に持っていき、涙を

流す。

千沙「いなかかないで……いやだ、いやだ……

……ごめんなさい」

うずくまって泣く千沙。

ふとキッチンに目を向け、立ち上がった

て包丁を手に握る。

千沙の声「彼の姿が見えなくなった途端、不

安になって死んでやろうと思いましたが、

それくらいつらい、苦しいと思ってた」

腕に当てるが、切ることはできない。

千沙の声「でも、私は死にませんでした」

包丁を落とし、泣き崩れる千沙。

リビングを見つめる。

佑一がいた場所には誰もいない。

千沙の声「意味がないと思って。死んでも意

味がない、腕を切り刻んでも、自分を傷

つけても意味がない。だって彼はもう、

決心していたから」

床に落ちた処方箋、その下にメモ用紙。

部屋で一人、うずくまって泣く千沙。

千沙の声「彼がいないなら意味がない。自分

を傷つけても殺しても、もう」

× × ×

カーテンから差し込む光、千沙の顔を照らす。

千沙、メモ用紙に気づいて拾う。

千沙の声「それで考えたんです。私はどうし

たいんだろう、どうすべきか、って」

メモには精神科の病院や相談窓口の

名前と番号。

千沙の声「死ぬことに意味を見出せないなら
どうすればいい？ 死なないなら、どう
すべきかって」

千沙、スマホに電話番号を入力するが、
すぐに切ボタンを押す。

千沙「無理……むりむりむり」

カーテンから差した光が佑一の処方箋
を照らす。

処方箋、佑一の名前を見つめる千沙。

× × ×

フラッシュ・千沙の部屋

「またな、千沙」と言っている佑一。

× × ×

千沙、スマホを掴む。

千沙「大丈夫、大丈夫」

顔を上げ、深呼吸。

震える手でもう一度、番号を入力。

千沙「手を掴んでくれる人はいら。待ってる

人が……頑張れ私、頑張れ……頑張ってる」

電話がつながり、千沙の肩が跳ねる。
千沙、両手でスマホを支えるが震えて
いる。

千沙「あ、あの……えっと」

電話口から聞こえる声。

千沙、意を決したように顔を上げる。

千沙「今、一人で……さっき彼氏にふられて

……違う、えっと生きづらくて、会社の

先輩が怖い人で相談できる人もいなく

て一人で……一人になって」

千沙、声が出なくなる。

スマホを持った手を下ろしかけた時、

佑一の声「大丈夫、大丈夫」

はっとした千沙、スマホを強く握る。

目をつむる千沙。

× × ×

回想・千沙の部屋

先ほどの佑一との会話。

佑一「助けてって叫べ、苦しいって素直に声
を出せ」

× × ×

目を閉じたまま、口を動かす千沙。

千沙「……けて」

佑一の声「大丈夫、掴んでくれる人はいる」

電話の向こう、相談員の声。

千沙「た……て、さい」

佑一の声「声を出せ、自分から」

千沙「たすけて（小声）」

佑一の声「手を伸ばせ、千沙！」

千沙「たすけて、助けてください！」

目を開ける千沙、涙がたまっている。

千沙「死にたいわけじゃない、生きたい……

もっと楽に、楽しく生きたい。けど難し

いんです、生きることが……誰かと一緒

に生きるってことが、この世界で生きて

いくってことが。普通の定義がわからな

くて、みんなと同じことをするのが難し

い、同じ時間を過ごすことが……誰かに

頼るってことが、できなくて」

× × ×

フラッシュ

会社で藤野にされたことや、佑一との思い出。

× × ×

千沙「一人で……一人では答えが出ない。だから助けて……助けてください」

携帯を持ったまま、大泣きする千沙。

カーテンの隙間から光が差し込み、

徐々に部屋が明るくなる。

千沙の声「ああ、そうか。そうだった。叫べ

ばよかった、手を伸ばせばよかったんだ。

助けてってちゃんと、素直に声にだせば

よかった」

千沙、泣きすぎてうまく喋れていないが、必死に話を続けている。

千沙の声「私は一人だけど、一人じゃない生き方もできる。手を伸ばせばちゃんと、掴んでくれる人はいたのに」

○大川クリニック・診察室。

泣きながら話している千沙。

大川は穏やかな表情で聞いている。

千沙「後になってやっと、それに気づいて：
：ごめんなさい。ここに来るまでに散々
泣いた、整理ついたと思ったのに」

大川「構わないよ。素直に叫べばいい、それが許される場所だから、ここは」

千沙「ありがとうございます、優しいなあ、
本当」

千沙、大川からティッシュを受け取って鼻を嘔む。

大川「そういえば、榎くんがここへ来てたのはどこで知ったの？」

千沙「処方箋にこの名前があったから。あと、彼が残してくれた病院リストに書いてあつて」

大川「ああ、なるほどね：：病院リストの中にうちの名前があった？ あれ？ 奏

さん、違う病院に通ってたよね？ あ、電話で違うところ紹介された？」

千沙「あ、いえ。私にあってるかもって一番
にこの病院紹介されました……けど」

大川「けど？」

千沙「彼と会っちゃうかもしれない病院には
絶対行かないって思ってた」

× × ×

回想・千沙の部屋。

電話をしている千沙、佑一からもらつ
たメモ帳が手元にある。

メモ帳「大川病院」の所に大きくバツ
テンが書かれている。

大川の声「ええっ、意地っ張りだなあ」

× × ×

千沙「（笑いながら）プライドが高いって彼に
も言われました。でも正解だったと思い
ます。あの頃の状態で彼に会ってたら私、
何してたかわからないから」

大川「……今は？」

千沙「話したいです、普通に。あ、普通っ
て何でしょうね？ うーん、向かい合っ

てゆっくりお茶でも飲みながら？」

大川 「いいね、それ。もしこの病院で会うなら、おいしいお茶出すよ」

千沙 「あ、彼には珈琲を出してあげてください。カフェイン中毒なので……この一年半で、治ってるかなあ？」

大川 「カフェインは控えるように伝えてたけど、今はどうだろうね。仕事忙しいっていったたしね、最後のほうは」

千沙 「楽しそうでした？」

大川 「体ごと千沙に向いて微笑む。

大川 「楽しそうにしてたよ、毎日充実してるって、元気に出て行った」

千沙 「そうですか……よかったです」

大川 「そういえば、奏さんはどうしてうちに来たの？」

千沙 「え？」

大川 「理由聞いてなかったと思って。あ、ここに来れば植くんに会えると思ったの

か」

千沙「それもありますけど、不正解かな？」

大川「ん？」

千沙、居住まいを正して畏まる。

千沙「大川先生、ありがとうございますございました」

大川「ああ、いえいえ、仕事だから、僕は」

千沙「仕事以上の事してますよ：：もう二時
になりますね、長い時間すみません」

大川「いいっていいって、話が聞きたいって
言ったのは僕だし。もう、大丈夫？」

千沙「はい」

大川「：：もし、楨くんが来たら、連絡」

千沙「あ、要らないです」

大川「要らない？」

千沙「ていうかそれ、病的にオーケーなん
ですか？ 個人情報」

大川、ぎくつとした顔をする。

千沙、少し笑う。

千沙「大丈夫です、自分でなんとかします：

： 掴みにいきます、自分から。この一年
半、彼と一度も出会えなかったんです、

同じ街に住んでるはずなのに。すごいで
すよね、逆に運命だなあって。だからき
つと、試されてるんだろうと思って。ま
だ会うタイミングじゃない、もっと成長
してからだ、もっと頑張れって言われて
るような気がして」

大川 「神様に？」

千沙 「どうですかね。先生は信じます？ 運
命とか巡り合わせとか、そういうもの」

大川 「嫌いではないけど、目の当たりにした
ことがないから、そういうものに」

千沙 「：：報告に来ます」

大川 「ん？」

千沙 「私が佑一さんと再会できたら、先生に
見せつけに来ます、運命とか奇跡とか、
そういうものを」

大川 「じゃあ僕は、ここで待っていよう。困
った時はまた、ここに来ていいから」

千沙「はい。苦しくなったりどうしようもなくなったらまた来ます。助けてってちゃんと、声に出します」

大川「待ってるよ。あ、でも二人で来るときは二人分の時間で予約してね。長くなるだろうから」

千沙「わかりました。診察時間の最後の患者として予約します：：二人で」

笑顔の千沙、大川も穏やかな表情。

○同・待合室

ドアが閉まる音。

受付で頭を下げていた高木、一呼吸して椅子に座る。

大川「あれっ、奏さん帰っちゃった？」

高木「先生！電話は終わったんですか？」

大川「うん、ちょうど今：：奏さんも？」

高木「はい。ちょうど今」

大川「ちゃんと挨拶したかったなあ」

高木「また来ますって言ってましたよ」

大川「ああ、そうそう。もしかしたら二人一緒
に予約してくるかもよ？」

高木「二人一緒に？」

大川「奏さんと榎くん、二人一緒に。また話
聞かせてくれるって」

高木「それ、診察として予約取るんですか？
まったく、もう」

呆れて机の上の資料を整える高木、佑
一のカルテを見て大声を出す。

高木「あっ！」

大川「わっ、どうしたの？」

高木、佑一のカルテを大川に見せる。

高木「榎佑一！ 彼です、先生！」

大川「？ ……え、なに？」

高木「さっきの来客！ 追い返しちゃったっ
て患者さん、彼なんですよ！」

大川「……………え？」

佑一のカルテの写真、アップ。

○（回想）同・受付

佑一、カルテの写真より肉がついて元
氣そう。受付の高木と話をしている。

佑一「新入りさんですか？」

高木「どういう意味ですか？」

佑一「患者じゃないんですよ、今はもう。え
つと、先生は？」

高木「診察中です」

佑一「え、もう時間過ぎてる……ああ、そっ
か、相変わらずだなあ。アポなしで来ち
やっつてすみません、改めます」

高木「当然です。次はちゃんと予約してきて
ください」

佑一「ははっ、しばらく来ないうちに強そう
な人入ったな」

高木「どういう意味ですか？」

佑一「なんでもないです。じゃあ、また」
爽やかに出ていく佑一。

高木「変な人……顔はかっこいいのに」

視線を落とす高木、カルテの佑一の写
真を見て顔を上げる。

佑一、もういない。

高木、再びカルテに目を落とす。

高木「え、嘘……えっ？」

大川の声「えええっ！」

○同・受付

驚く大川に、深く頭を下げる高木。

高木「すぐに気づかず申し訳ありません！」

大川「高木さんが謝ることじゃないよ。だってそんな奇跡みたいなこと……」

大川、落ち着きを取り戻して佑一のカ
ルテを見て。

大川「奇跡みたいなことが起こりかけてる」

高木「？ 先生？」

大川「ねえ、高木さん。奇跡って、努力の末
に起こるものだと思わない？」

高木「え？」

大川「奏さんも榎くんも頑張ったよ。話を聞
いた僕だからわかる。ちよつとくらいご

褒美が、運命が彼らの味方をしたっていいじゃないか」

大川、小窓の外を見上げる。

大川「自分で何とかするって言ったんだ、二人を信じよう」

高木「……奇跡って、本当にあるんでしょうか？」

大川「どうだろうねえ、僕はそういうものを目の当たりにしたことがないから」

高木「もし、奇跡とか運命が存在しなかったら？」

大川「その時はその時だ、手を貸そう……手を伸ばしやすい環境を、彼らが助けてつて言える場所を作ろうね、高木さん」

頷く高木、小窓を見上げる。

高木「お手伝いします、先生」

○電車・車内

シートに座りスマホを見ている佑一。

佑一 M 「もし一つだけ、奇跡を起こせるとしたら。もう一度、彼女と出会いたい」

スマホ画面、営業先リストの中の一つに「大川クリニック」が入っている。

佑一 M 「千沙に言っただけでなかったことがあるんだ。千沙の知らない、本当のこと。俺たちが出会った、最初の日」

スマホを操作する佑一、千沙との写真を見て微笑む。

佑一の前には人影（千沙）が立つ。

佑一 M 「迷惑かけたとか思わなくていい、謝らなくていい。だって俺は、ずっと好きだったから。千沙が俺と出会う前から、ずっと」

人影に気づき、顔を上げる佑一。

佑一 M 「最初の出会いはよく晴れた秋の日、君がまだ大学生、就活生だった時」

○（回想）電車・車内（三年前）

T・3年前

暗い画面、電車の走行音。

千沙の声「あの……座りませんか？」

つり革をもって立っていた佑一、目を開ける。佑一の目の前の席に、リクルートスーツを着た千沙が座っている。

佑一「俺に言ってる？ いやいや、他に席を必要としてる人……」

千沙から視線を外した佑一、車内が空いている事に気づく。

佑一「え、あれ？」

千沙「体調悪いんですか？」

佑一「……体調悪そうに見えました？」

千沙「難しい顔してグラグラしてたので。もしかして寝てました？ 起こしちやつたならごめんなさい」

佑一「え、いや。寝てたとしても嫌な夢だったと思うから、助かりました」

佑一、千沙のすぐ隣に座る。

距離が近いことに驚く千沙だが何も言えず、メモ帳（就活ノート）を見る。

佑一「就活ですか？」

千沙「え、はい。今日が最終面接で、受かつ

たらこの電車で通勤すると思います。あ、

この電車っていうか朝の通勤時間帯の」

佑一「あー、俺もです。いつもは朝乗ってま
す。今日は社内試験があつて」

千沙「社内試験？」

佑一「上司に自分の良さをアピールするとか

何とかで。自分ではよくわからなくて、

それで悩んでて……つて、何ペラペラし

やべつてんだろ、ごめん」

千沙「かっこいいですよ、すごく」

佑一「は？」

千沙「あ、すみません……かっこいい顔して

るから、それがアピールポイントになる

んじゃないかと思って」

佑一「顔って……いやいやいや」

千沙「ですよね、ごめんなさい」

佑一「いえ……あ、いや」

千沙「やつぱり、アピールポイントですよ」

佑一「……え？」

千沙「顔覚えてもらえるじゃないですか。あとほら、私が今言ったように一目でアピールポイントわかるし、メリットだらけだと思ったけど……すみません、おかしですよね。社会経験のないやつが何言ってるんだって感じですよ、すみません」

佑一「あ、いや……よく喋るね」

千沙「あっ、すみません。普段こんなに喋らないんだけど」

千沙。メモ帳に視線を落とす。手が震えている。

佑一「緊張しますよね、試験って」

千沙「え？ あ、はい……」

佑一「俺も普段は、知らない人に話かけないです。緊張してこんなに、喋ってんだと思う」

千沙「同じですね……私も今、自分で自分がわけわかんないって思ってます」

佑一「（笑って）変なこと言ってますよ、確かに」

恥ずかしそうに俯く千沙。

佑一、窓の外を見て。

佑一「覚えててくれますか？」

千沙「え？」

佑一「俺の顔、覚えやすいつて言ってたから」

千沙「あー、えっと」

佑一「受かったら一緒の電車なんだよね？」

また会えるだろうから、そうしたら。また

会えたら、話しかけていい？」

千沙「すみません、私、人の顔覚えるの苦手

なんです」

佑一「……え？俺の顔覚えやすいつて」

千沙「覚えたい、覚えたくなくなるくらいかっこ

いいとは思うけど！あ、じゃあ目が合

ったら」

佑一「目が合ったら？」

千沙「目が合ったら覚えてますってことで、

話しかけてください。それなら大丈夫で

す、変な人って思いません！ あっ、降りなきや」

千沙、慌しく立ってドアに向かう。

千沙「すみません、また！」

佑一「あ、ああ……また」

電車を降りる千沙、すぐに扉が閉まる。

茫然とする佑一、電車が発車する。

佑一「めっちゃ喋るじゃん……なんか緊張ほぐれた、うまくいくかも」

笑みを浮かべる佑一、窓の外を見る。

佑一「また会えるかな。目が合ったら……もし、また会えたら」

鞆からノートを取り出す佑一だが、すぐに閉じて窓の外を見る。

佑一「大丈夫、大丈夫。頑張れ俺、頑張れあの子……頑張っ」

窓の外、移り変わり流れる景色。

佑一の声「もう一度会いたいと思ってた。会えたら絶対、話をしようと思ってたんだ。

聞いてください、今日までの三年間」

○電車・車内

佑一の視線。

スマホを見ている千沙が、佑一の目の前に立っている。

佑一、千沙に声をかける。（無音、口パクで）

佑一に気づいた千沙。

見つめあう二人。

佑一の声「心の病と闘った日々と、彼女に恋した千九十五日の物語を」

〈完〉